



道徳だより

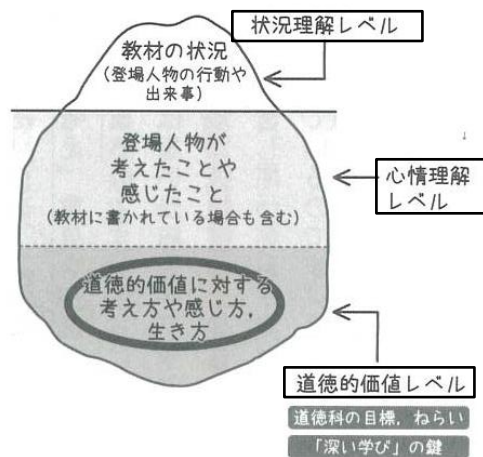
2025.9.10 号
みよし市立緑丘小学校



本校では、道徳の授業力を高めるために畿央大学大学院の島恒生教授にご指導を仰いでいます。島先生からは道徳の授業が子どもたちの「深い学び」につながるようにさまざまな指導法を示していただけます。その中で今回は道徳性について考えた氷山のモデルを授業レベルで考えてみたいと思います。私たちは、授業を行うときには常に頭に入れて指導をしています。

状況理解レベル

氷山の水面より上の見えている部分は、授業で言えば【教材に書かれている部分】で読めば分かることです。ここで授業を進めていっても道徳性にはたどり着けません。「だれが出てきましたか」「主人公は何と言ったでしょうか」など道徳の授業で深めるところではありません。ただ、この状況を子どもたちが分かっているないと道徳の授業は始まりません。そこで、緑丘小学校では、教師が心を込めてゆっくりと範読をしたりCDを使ったり、難しい言葉が出てきたときは説明を加えたり、挿絵を使って状況理解を助けたりしています。また、範読の後に各自のペースでもう一度読みだし、教材を前もって何度も読ませたりすることもあります。



道徳性を氷山のモデルで例えると

心情理解レベル

教材に書かれている状況が分かったら、道徳の授業がスタートできます。どのようなことを考えたのか、または、どんな気持ちだったのかをみんなで考えます。道徳性は、心の内面であることから心の中で考えていることに焦点を当てます。登場人物の心情や心の中が教材に書かれている場合もありますが、その場合も心の中を想像して考えさせます。この時「教材」を使っていることの効果が出ます。授業で考え合いたいのは、心の中です。もし、それぞれの子どもに最初から自分の経験を思い出させて話をさせると心の中に入る以前に、その経験の状況が違うため、話し合いはかみ合いません。「それは、いつ、どこの話なのか」それぞれの状況理解レベルに話が集中してしまいます。これに対して、「教材」という共通の土俵で、登場人物に自分を重ねて考え、意見を交流させることで、心の中に話し合いの中心を定めることができます。さらに、その話題が、教室の子どもたち自身のことではないからこそ抵抗感なく発言することができます。ただし、登場人物の心の中として発言していても、実は、子ども自身の心の中として発言されているのです。つまり、それぞれが「自己を見つめ」ながら話し合いに参加できるというわけです。

道徳的価値レベル

教材の登場人物の感じたことや考えたことの中に、道徳的価値についての見方、感じ方、考え方がかかれています。それを明らかにしていきます。これがまさに、道徳の授業の目標であり、その授業のねらいに当たるところです。また、授業を進めるために教師は、第三層を子どもの言葉で想定し、その内容について話し合う授業に近づくことで「深い学び」になるかどうかに関わってきます。また子どもたちは、自分なりの表現をするため、教師が想定した言葉どおりには発言しません。なぜなら自分との関わりで考えるからです。その発言がねらいとする内容の深さや広がりなのか判断しながら学級全体の話し合いへと広げていくことが大切になります。